

サガ・シンポジウムの特集にあたって

松 沢 哲 郎 (京都大学霊長類研究所)

「霊長類研究」の第15巻2号(特集号)として、第1回サガ・シンポジウムでの発表をもとにした論文集をお送りする。紙幅の関係でいちいちのお名前を挙げることは許されないが、シンポジウムの実施ならびに特集号の編集に尽力された数多くの方々に深く感謝したい。

1998年11月19日と20日の両日にわたって、犬山市のフロイデを会場として、第1回サガ・シンポジウム「アフリカ大型類人猿の研究・飼育・自然保護」が開催された。SAGA(サガと発音する)は、「アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い Support for African/Asian Great Apes」と称する非営利団体の英文略称である。

すべての類人猿は、「絶滅の危機に瀕した種」としてワシントン条約(CITES)に規定されており、われわれにとってかけがえのない進化の隣人と言える。SAGAは、ヒトに最も近縁な大型類人猿の研究のあり方を考え、飼育環境の改善に取り組み、野生の生息地の保全を求めていく活動として、京都大学霊長類研究所の研究者が中心になって発足した。ただし、研究者だけでなく、動物園関係者、省庁などの行政に関わる方、NGOで霊長類や熱帯林の保護・啓蒙活動を展開している方、メディア関係者、さらには大型類人猿に関心をもつ一般の方々への参加も呼びかけた。なお、第1回サガ・シンポジウムは、霊長類研究所の共同利用研究会としての助成を受け、ならびにCOE形成基礎研究費(代表者:竹中修)の発足を記念する国際シンポジウムを内包するものとして開催された。

幸い、多くの方々のご理解とご協力によって本シンポジウムは盛会だった。全体で24件の口頭発表ならびに講演があり、65件のポスター発表・

ブース展示があった。参加者総数は約360名だった。招待講演としては、ジェーン・グドール(イギリス、JGI所長)、ヤン・ファンホーフ(オランダ、ユトレヒト大学教授)、西田利貞(京大教授)の3名の講演があった。また第2日目の午後のセッションは、京都大学霊長類研究所のCOE形成基礎研究発足記念シンポジウムと銘打っておこなわれた。COE形成基礎研究の研究代表者である竹中修、霊長類研究所所長の杉山幸丸、アレクサンダー・ハーコート(カリフォルニア大学デヴィス校教授)の3名の記念講演が英語でとりおこなわれた。「類人猿の進化と人間の起源」を考えるCOE形成基礎研究が、たんに類人猿の研究だけではなく、かれらの飼育や自然保護も支援するSAGAの活動と軌を一にして発足したことになる。2日間にわたるシンポジウムのプログラムの概要を以下に掲げる。

11月19日には以下のとおり。シンポジウム「野生調査地の現状と展望」(座長:五百部裕)。各調査地の概要報告を背景にして、研究のトピックスをスライドやビデオをまじえて紹介していただいた。マハレ/上原重男(札幌大)、ボッソウ/山越言(京大)、ワンバ/古市剛史(明治学院大)、ンドキ/黒田末寿(滋賀県立大)、カリンズ/橋本千絵(京大)、ウガラ/小川秀司(中京大)、カフジ・ガボン/山極寿一(京大)、インドネシア/鈴木晃(京大)。コメント:三谷雅純(兵庫人と自然の博物館)。

シンポジウム「飼育下の大型類人猿の現状と展望」(座長:松林清明)。動物園など飼育下の現状と課題、医学研究におけるチンパンジーの果たした役割とその重要性、人と人以外の動物との関わりなどについてご講演いただいた。吉原耕一郎(多摩動物園)、日本のチンパンジーの現況:国内